

P-075

保育学生における小児一次救命処置の学習内容とその効果に関する 国内文献の検討

小林 佳寛、藤田 千春、場家美沙紀

杏林大学 保健学部 看護学科 看護養護教育学専攻

【目的】

保育施設における事故（こども家庭庁、2024）では、死亡事故や重篤な事故が報告されており、意識不明に至る重度なものが23件、死亡につながった事故は6件発生している。そのため、新卒保育士が小児一次救命処置に関する知識や技術を習得し、必要時に実践できるよう教育支援していく必要性がある。そこで本研究の目的は、保育学生の小児一次救命処置に関する学習内容とその効果を国内文献より明らかにすることとした。

【方法】

医中誌Webを使用し、市民にAEDが普及した2004年から2025年までの期間で文献検索した。キーワードは「保育」「心肺蘇生or救命処置」として、検索条件を研究論文（原著論文、研究報告、実践報告、資料）とした。検索された計126文献のうち抄録等を精読し、研究目的に該当する内容の記載があり、重複を除いた計7件を対象文献とした。保育学生における一次救命処置の学習内容とその効果について記載のある内容を抽出した。

【倫理的配慮】

研究対象文献の著作権の取り扱いに配慮しながら実施した。

【結果】

対象となった文献の研究方法は、実施前後の学習効果を測る量的研究であった。保育学生が学習した一次救命処置は胸骨圧迫・人工呼吸、AEDの使用方法が6件、異物除去法は4件であった。その際、日本赤十字社幼児安全法講習教本を学習に取り入れることや、救命救急士や看護師免許所持者から教授してもらうこと、巧く出来る学生がチーフになり他のメンバーに能動的に働きかけ共同学習を促すものがあった。学習効果として、胸骨圧迫、人工呼吸、AEDの使用方法、異物除去法で知識、実施意思、実施能力において学習前との有意な得点の上昇が認められた。手技獲得に向けた継続的な講習回数について保育学生の65%が1～4回受講の必要性を回答していたものもあった。

【考察】

保育学生に向けた一次救命処置では、胸骨圧迫や人工呼吸の他にAEDの学習もされていた。近年は保育所のAEDの設置も進んできているため、学習に取り入れられていた事が考えられた。また、小児一次救命処置の学習後は知識や能力の効果がみられていたことや、学内の学びを終えても継続的に複数回練習する必要性を感じていた者もいたことから、保育養成課程終了後も講習の機会をもつなど、繰り返し学習する機会の必要性が考えられた。